
浪花から来た黒き女刺客(スパイ)

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浪花から来た黒き女刺客^{スパイ}

【Nコード】

N4218H

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

『浪花から来た黒き少女』の続編小説。黒の組織からの刺客マリアの魔手が、コナンと哀に襲いかかる。この小説はコ×哀・ジ×マです。

第01話：全ての始まりは1ヶ月前（前書き）

お待たせしました、皆さん。

ついに『浪花から来た黒き少女』の続編が始まります。

この小説ではマリアやジンの性格がかなりちがっています。

また、この小説ではコナン×哀・ジン×マリアというカップリングになっています。

異色カップリングが苦手な方はご注意ください。

第01話：全ての始まりは1ヶ月前

東尾邸

東尾マリアは自宅にて、ソファーでリンゴ味のチューハイを飲んで
いた。

「ウチがあの方の命で帝丹小学校に潜入捜査で入ってから、もう1
ヶ月か・・・」

マリアはチューハイを一気に飲み干す。

ゴクゴク！

「まさかホンマに見つかるとは思わなかったけどな。工藤新一とシ
エリーが・・・」

マリアはゴミ箱に空き缶をスローインする。

ブン！

カン！

「やっと目的が果たせるんや。ウチとジンの目的がな・・・」

マリアはメロン味のチューハイに手をつけた。

カシュ！

1ヶ月前・・・

アメリカにある某組織に、ジンは戻って来た。

今日も組織の裏切り者を処分して来たのだ。

「フウ、これで4人目か・・・裏切り者とはいえ、かつての同志を処刑するのはやはり気が重いな・・・」

ジンは道中で買った缶ビールを飲んでいる。

「早くAPT-X4869の研究が進まんものかね。研究に携わってたシェリーが失踪してからしばらく滞ってるしな・・・ハア・・・」

ジンはため息をつきながら、ある部屋までやって来た。

「マール、今帰ったぞ。」

ジンはノックもせず、ドアをガラツと開ける。

ガラツ！

そこには、着替え中のマールがいた。

「ちよつ、ジン！？」

「わ、悪い・・・着替え中だったか・・・」

ジンはそう謝りつつも、マールの柔肌をチラチラ見ている。

「・・・てけ・・・」

「ん？」

「今すぐ部屋から出てけ、このドスケベっツ!!!!」

ブンッ!!

ズガンッ!!

「イッデッツ!!!!」

マールがブン投げた学生カバンが、ジンの顔面にクリーンヒットした・・・

第02話：見破られた偽装

「ジン？レディーの部屋に入る時はノックせえって、ウチいつも言うてるやんな？」

マールは腕を組み、ジンを睨みつけている。

「スマン・・・だが別に見られて減るもんじゃねえだろ？オレとオマエの仲なんだ・・・し！？」

ジャキ！

マールはジンのオデコに木刀を突きつけた。

「それ以上何か言うてみい・・・容赦なくアンタの眉間貫くで？」

マールは鬼のような形相だ。

「ス、スマン・・・」

ジンが謝っていると、女の声が聞こえてきた。

「あらあら、相変わらずジンはマールに頭が上がんないのね。」

ベルモットが部屋に入ってくる。

「何の用だ・・・冷やかしにでも来たのか、ベルモット・・・」

「半分はそうよ。」

「ほな後の半分は何なん？ベル姉。」

「あの方から呼び出しよ。」

ジンとマールは、あの方の元へと向かった。

「外に出ていた構成員が偶然撮ったという写真をあの方から預かって来たが・・・」

「見た感じはよう似とうな、この2人の子供。」

ジンとマールは、コナンと哀が写っている写真を見ていた。

「しかしこの2人が仮に死んだハズの工藤新一と失踪中のシェリーだとしても、人間の身体が縮むなどありえるのか？」

「それやったら試してみればええやないか？これでな。」

マールは一錠のカプセルを取り出した。

スッ！

「それは、A P T X 4 8 6 9？」

「ベル姉にシェリーが使った研究室の場所聞いてな。何錠か拝

借しといた。」

マールはマウスを4匹用意すると、実験を始める。

程なく、結果が出た。

「出たで、結果。」

「どうだった？」

「ウチの予想した通りや。4匹のマウスの中で人間換算年齢で言う
と20歳前後のマウスだけが、死なんと幼児化しよったわ。」

「そうか、他の3匹は死亡か。そういえば前に工藤新一の死体が見
つからずシェリーに自宅を家捜しさせた事があったが、あの時シェ
リーは確か工藤新一の調査報告書を『死亡確認』としていたな・・・

」

「ホンマは工藤新一が幼児化した証拠を掴んどったのに、報告書を
ごまかしよったワケやな。ナメたマネをしてくれるわ。」

「という事は、シェリーは今工藤新一と一緒にいるという事か・・・

」

「ジン。ウチとアンタを除いた5獄衆の3人に声かけといて。」

「カシャツサ、メスカル、ミードか。マールはどうするんだ？」

「ウチはスパイとして、この2人が通うてそうな小学校を探る。も
ちろん幼児化してからな。」

「頼んだぞ、マール。」

「任しとき、ジン。」

マールは不敵に微笑んでいる。

そんな2人の会話を、密かに聞いている者がいた。

ベルモットである。

「（ヤバい事になったわね・・・このままじゃクールガイとシェリーが見つかったらうわ。何か手を打たないと・・・）」

ベルモットは意を決すると、静かにその場を後にした。

第03話：女スパイ・東尾マリア

それからマールは幼児化し、東尾マリアとして帝丹小学校に潜入して来た。

狙いはもちろんコナンと哀だ。

その事を心配したベルモットは、教育実習生として帝丹小学校に潜り込んだ。

1週間後、ベルモットはコナンと哀を屋上に呼び出した。

帝丹小学校・屋上

「こんな所に呼んで何する気だ？ベルモット。」

「あら、やっぱり気づいてた？」

「そりゃ気づくわよ。時折あなたの特徴的なオーラが放たれてたからね。」

「あらあら。組織の人間の気配は消したハズなのにねえ。」

「それより何でオマエがここに来てる？灰原には手を出さないんじゃないかったのか？」

「組織の新しい構成員が動き出したのよ。」

「組織の？」

「ええ。情報収集に恐ろしい程に長けた探り屋で、コードネームは・
・マール。」

「マール？」

「そうよ。とりあえず、関西弁の少女には気をつけなさい。」

「わかったけど・・・何でアンタそこまでしてくれるんだ？」

「あなた達の事が心配だからよ。」

「ありがとう、ベルモット。」

「どういたしまして。それじゃ、頑張つてね。」

それから2週間後、ベルモットは実習期間を終えて組織に帰郷しようとしていた。

「（誰かにつけられてる気がする・・・）」

ベルモットは後ろを振り返る。

「マール、そこにいるんでしょう？出て来なさい。」

ベルモットが叫ぶと、次の瞬間そこにはマリアが現れた。

「さすがはベルモット。気づいたか。」

「当たり前でしょ。私に組織の人間が見分けられないとも思った？」

「全然。むしろアンタのその才能には感服するわ。」

「あなた、工藤新一とシェリーを探し出してどうするつもりなの？」

「別に何もせえへんよ？ただ組織の研究に役立てるだけや。」

「（マールは今のトコ、工藤新一とシェリーの正体があの子達だつて知らない。あの2人は私が守る！！）」

ベルモットは手刀で、マリアを背後から襲った。

「マール、覚悟！！」

シュッ！

だが、マリアはアッサリかわす。

ヒョイッ！

「ウソ！？」

「悪いな、ベル姉。ウチ、胴体視力には自信あんなん。」

そう言うと、マリアは拳でベルモットの腹を強打した。

ドゴォー！！

「うつ・・・」

ベルモットは倒れる。

「ジンの言った通りやな。ベル姉は困った子猫ちゃんやで。さてと。」

マリアは携帯で電話をかける。

「ああ、ウチや。ちょお来てくれへんか？」

程なく、5獄衆の3人がマリアの前にやって来た。

「呼んだか、マール？」

「ベル姉を例のアジトに運んどいて、カシャツサ。」

「了解。マールはどうするんだ？」

「ウチはめばしいヤツらを突き止めたから、今度接触する。」

「1人で大丈夫？」

「心配すんな、メスカル。ウチはしくじらん。」

「それでは、2週間後に。」

カシャツサ・メスカル・ミードの3人は、ベルモットを運んで行った。

2週間後マリアはコナンと哀を恋仲にし、同時に彼らの正体が工藤新一とシェリーである証拠を掴むのである。

第04話：東尾マリアの正体

「ほな、そろそろ行こかな。」

マリアはアジトから出ようとしている。

そんな彼女に、ベルモットが声をかけた。

彼女は手足と体をロープでぐるぐる巻きに縛られている。

「あなた、工藤新一とシェリーにどうやって接触するつもり？」

「そんな簡単な事や。ウチ知ってるんやで？アンタが工藤新一の家を突き止めてる事をな。」

「なっ!？」

「アンタの携帯に彼の住所が登録されてるんは知っとう。後はアンタの携帯を見るだけや。」

マリアはベルモットの携帯を取り出す。

「なるほどな。米花町2丁目21番地か。確か前にシェリーが家宅搜索しとったっけな。ん？こっちの22番地いうんは工藤新一の友人や言うてた阿笠博士っちゅうヤツの家の住所か？」

「あ・・・」

「後はここに手紙を出して、2人を呼び出すだけやな。」

「止めなさい、マール!!」

「ん？」

「あなたも知ったでしょ？クールガイとシェリーがどれだけ愛し合ってるか！その2人を邪魔するなら、私はあなたを許さないわよ！」

「うるさいヤツやなあ。メスカル、ベルモットの口塞いでえな。」

「了解。」

メスカルはベルモットの口にガムテープを貼った。

「んっ!!」

「ほな、行つて来るわ。」

マリアは外へと出て行く。

「（クールガイ・・・シェリー・・・!!）」

ベルモットは2人の身を案じていた。

阿笠邸

マリアが動き出してから1時間後、コナンは阿笠邸に来ていた。

哀に呼ばれたからだ。

「哀、何の用だ？」

「ベルモットから手紙が来たの。今夜8時に杯戸シティホテルに来てほしいんだって。」

「そうか。何が話したい事でもあるのかな？」

コナンと哀は、出かける準備を始めた。

夜8時、コナンと哀は杯戸シティホテルの屋上へとやって来た。

「約束の時間だが・・・」

「ベルモットはどこかしら？」

辺りを見回すコナンと哀。

その目線の先に、黒いローブを羽織った人物がいた。

「ベルモット・・・か？」

コナンは恐る恐る近づく。

「残念・・・外れや。」

ロープの人物は振り返ると、フードを脱いだ。

バサッ！

「オ、オマエは・・・」

「東尾マリアちゃん!？」

「おお、こんばんは。」

「こんばんはじゃねえよ！何でオマエがここにいる!？」

「ベルモットはどうしたの!？」

「いちいち質問が多いヤツらやな。そんなに気になるんやったら、教えたるわ。ウチが何者なんかな。」

そう言うと、マリアはロープをはぎ取った。

バサアッ！

ロープの下は、忍び装束のような格好だ。

「露出度の高い格好だな・・・ん？哀、どうした?」

コナンが哀の方を見ると、哀はガタガタと震えている。

「コ、コナン君あれ見て・・・マリアちゃんの右胸の下を・・・」

「右胸の下？」

コナンがマリアの方を見ると、彼女の右胸の下にカラスの片翼とハチをあしらった物が見えた。

「何だ、あのマークは？」

「あれは、黒の組織の中でも特に優秀な構成員が配属できる集団・・・5獄衆のタトゥーよー!!」

「こゝ、5獄衆だと？」

「その通り・・・ウチは5獄衆の1人・・・マールや。」

第05話：マリアの襲撃！！

「ウチは5獄衆の1人、マール・・・組織の探り屋や。工藤新一君、シェリー？」

マリアの目は、とても鋭い。

「5獄衆だと・・・？しかも、オレ達の正体まで・・・」

「でもこんな子、私見た事ないわ！だって、かつては私も5獄衆だったんだもの！」

「哀が元5獄衆？」

「う、うん。ただ、私は両親の地位を引き継いだけだったけど・・・」

「アンタが知らんのも無理ないわ。そやかてウチ、裏方やったしな。」

「裏方？」

「そ。ウチは組織に敵対する勢力や、裏切り者を消す役目・・・ウチの存在をともに認知してたんは、ウチと密接に接触しottaジンくらいや。」

「ジンが？」

「ジンはウチのオヤジと親しかったからなあ。それでウチらはよく

一緒に過ごすようになったんや。シェリーが抜けた後、ウチは実力を買われて新たな5獄衆になった。」

「オマエのその姿も、A P T X 4 8 6 9で縮んだ姿か？」

「そやで。ウチ、ホンマは19歳やしな。」

「ベルモットのフリして呼び出したのは何のためだ？ベルモットは無事なのか？」

「会いたいんやったら、会わしたるで。ただしウチに勝てたらな！」

マリアは背中から無数のハチを発生させた。

ブアッ！

「スズメバチ！？」

「ちやうちやう。この子らはヒメマリアバチ言うてな、人殺す毒なんかあらへんよ。」

ハチの内の2匹が、コナンと哀の腕を刺した。

プスッ！

「うつ！？」

「ただし、刺した相手を眠らせる毒はあるけどな。」

「う・・・」

ドサッ！

コナンと哀は、倒れ込んでしまった・・・

第06話：コ哀、囚われの身

マリアはジンの部屋で、報告をしていた。

マリアは元の姿に戻っている。

「ジン、ええ知らせや。捕まえて来たで？工藤新一君とシエリーを。」

「早いな。さすがはマールと言ったところか。で、今2人は？」

「ベルモットと同じ地下牢に放り込んだいた。」

「仕事が早いな。何か食べるか？」

「アンタでもええワケ？」

「オマエな、誰かいたらどうすん・・・」

言い終わらない内に、ジンはマリアにベッドに押し倒された。

ドサッ！

「そんなん構わへん。ウチはアンタが好きなんやから。」

そう言うと、マリアはジンにキスをする。

「ん・・・」

「なぐに甘々な事やってるのよ？」

「!?!」

ジンは慌ててマリアから離れた。

「ノックぐらいしろ！メスカル、ミード、カシャッサ！」

「そんな事やってるアンタらに話しかける勇氣はないわよ！」

「その程度で離れるとは軟弱軟弱！男女は裸一貫で語り合うもんじやき！」

「カシャッサ、それやったら年齢制限しなきゃいけなくなるってばこの話。」

「誰に対しての配慮ぜよ、ミード？」

「読者及び視聴者よ・・・」

「？」

カシャッサは意味をよく理解していなかった。

「・・・ナン君、コナン君！」

「ん・・・」

「コナン君!!」

「う・・・哀？」

「良かった、気がついた！」

「哀、ここはどこだ？」

「組織の地下牢よ・・・」

「ベルモット！無事だったのか！」

「ええ、無事は無事だけど・・・この通り、体をロープで縛られて後ろ手に手錠を掛けられているわ・・・あなた達と同じくね。」

コナンは起き上がると、自分や哀の状態を確認する。

「これは・・・」

「監禁ね、間違いなく。」

「ハア・・・」

コナンと哀は、ため息をついた。

第07話：マリアの悲しき過去

「ベルモット・・・ベルモットはマリアちゃん・・・マールがどんなヤツか知ってるのか？」

「ええ・・・よく知っているわ・・・なぜなら彼女は・・・元5獄衆の1人、テキーラの愛娘なんだから・・・」

「テ、テキーラの愛娘だと!？」

「コナン君、テキーラを知ってるの？」

「ああ・・・テキーラといえば、ゲームの新作発表会でおっちゃんについて行った時出会った構成員だ・・・運悪く、取引相手を狙った爆弾が彼に渡ってしまい爆死したけどな・・・」

「そう・・・」

「その日、ちょうどテキーラは彼女に仕事が終わったら食べに行こうと言ったらしいの。でも、夜になっても帰らなくて・・・テキーラの死を彼女が聞かされたのは、丸1日経った朝だったらしいわ・・・」

『えゝ、またオヤジ遠出なん?』

『ああ、スマンな。取引相手がゲーム発表会に出るってんで、わざわざそこまで出向かななんのや。ジン、マリアの事頼むで。』

『ああ・・・』

しかし、テキーラは夜になっても帰っては来なかった。

そして、次の日の朝・・・

『オレだ・・・何だと・・・？』

『どないしたん、ジン？』

『テキーラが・・・爆死したらしい・・・』

『え・・・』

『取引相手に恨みを持つてるヤツがいてな。ソイツを狙うつもりで用意した爆弾が、誤ってテキーラに渡ってしまったようだ・・・』

『そんな・・・オヤジ・・・何でなんよあ・・・』

『マール・・・泣きたいならオレの胸で泣け。テキーラを殺したヤツは、オレが必ず突き止めて殺す。』

『うん・・・おおきにな、ジン・・・』

マリアはジンにすがりつき、しばらく泣いていた・・・

「・・・」

マリアはうつすらと目を開けた。

「ハアハア・・・またあの夢かいな・・・」

「マール、起きたのか。」

「ジン。」

「随分うなされていたようだが・・・またあの夢を見たのか?」

「うん・・・」

「安心しろ、オレがずっとオマエの側にいてやる。」

「おおきに、ジン・・・」

マリアはジンにキスをした。

第08話：マリアとジンの会話

夜7時頃、マリアが食事を運んで来た。

「ホラ、食事や。食べてる間は縄と手錠外したる。」

マリアはコナン達に近づくと、縄と手錠を外した。

「・・・」

「あ、余計な事は考えん事やな。ウチに何かしたら、ハチを差し向けるから。」

コナン達は静かに頷いた。

「それにしても、まさかマリアちゃんがテキーラの娘だったなんてな。」

「ベルモットから聞いたんか。」

「ああ・・・テキーラの件、悪いとは思ってるよ・・・」

「気にすんな、悪いんはあの犯人やったんやから。それに、あの犯人やったら殺したしな。」

「な、何！？犯人を殺した！？」

「ああ。殺したんはジンやけどな。」

「ジンが・・・」

「食べ終わったみたいやな。トイレ行くんやったら、出てすぐの所にあるわ。」

コナンと哀は、牢屋から出てトイレに向かう。

牢屋にはベルモットとマリアが残った。

「マール・・・あなた、新一君とシェリーをどうするつもりなの？」

「今ントコ予定はあらへんよ。ジンに聞かなわからへんわ。」

「新一君とシェリーに万が一の事があつたら・・・私はあなたを許さないわよ。」

「安心し。今ントコ殺すつもりはないらしいわ。ジンにしては珍しいけどなあ。」

「そう・・・」

それからしばらくして、コナンと哀が戻って来た。

マリアはコナン・哀・ベルモットを縛り直す。

ギュツ、ギュツ！

「大人しゅうしときや。」

マリアは牢屋にカギを掛けると、部屋を出て行った。

「ジン、戻ったで。」

「アイツらは大人しくしてるか？」

「今んトコはな。」

「ジン、結局あの子らどうするん？」

「あん？」

「データは採取したし、あの子ら普通に用済みやる？」

「なら、オマエはヤツらを始末すべきだと言っのか？」

「別にんな事言ってへんやん。」

「オマエ、たまにキツイ事言っからな・・・」

「ま、ゆっくり考えたらええか。時間はあるんやから。」

「そうだな。」

「ほなウチ、オフロ入って来るわ。」

「オレも一緒に入ろうか？」

「ジン・・・」

「ん？」

「アホかっ！！」

バキッ！！

「イデッ！！」

ジンはマリアに木刀で殴られた・・・

第09話：マリアの回想、ジンとの出会い

「ジン・・・」

「は、はい・・・」

マリアは腕組みをしながら、ジンを睨みつけていた。

ジンは正座している。

「ジン・・・いつからアンタは、そういうデリカシーない事言うようになったんかなあ？」

マリアの目は鋭い。

「ス、スマン、マール・・・だが、最近まで一緒に入ってたじゃねえか！だから今日も入れると思ってだな・・・！！」

マリアの背後に、ドス黒いオーラが立った。

ゴゴゴゴゴ・・・

「ジン・・・」

「な、何でしょう・・・？」

「ドアホゥッ！！」

バキッ！！

「イダッ・・・」

ズン！

「しばらく頭冷やしときー！」

マリアはジンをその場に残し、風呂場へと向かった。

「全く、ジンはホンマに全くー！」

マリアは不機嫌な表情で、湯船に浸かっている。

「初めて会った時と比べると明るくはなったけど・・・度が過ぎすぎやー！」

マリアはテキーラに連れられ、初めてジンに出会った頃の事を思い出していた。

『ジン、コイツがオレの娘・・・マールや。仲良うしたってくれ。』

『ああ・・・』

『こないな弱そうなおッサンが上位幹部かいな。世も末やねえ。』

『何だと・・・もう1回言ってみる・・・』

『何度でも言うたるわ。アンタは弱い!』

『良い度胸だ、小娘・・・テキーラの娘だろうが容赦はせん!オマエにオレの強さを思い知らせてやる!!』

ジンはそう息巻き、マリアに挑んだのが・・・

『終わりや。』

ピクピク・・・

『バカな・・・このオレがこんな小娘に負けるとは・・・』

そう、ジンはものの数秒でマリアに敗北してしまったのだ。

『あゝ、楽しかった。ほなオヤジ、ウチ寝るゝ。』

『ああ、おやすみ。』

「思えばあの日からやったなー、ジンがウチとよう一緒に過ごすようになったんは・・・それで極めつけがあれや・・・」

『マール……』

『何や、ジン？』

『オレ……オマエの事が好きなんだ。』

『……冗談やないやろね？』

『冗談でこんな事言うか！』

『それもそうか……ええよ！友達からで良いんやったらつき合う
たるわ！』

「ジンはホンマ、直球やったからな。今にして思えば照れる告白・
……やった……わ……」

ブクブクブクブク……

マリアはそのまま、湯船に沈んだ。

第10話：マリアとジンの大人な関係

「ん・・・」

「お、気がついたか。」

「ジン・・・ハッ！ウチ、何して・・・」

「オマエ、風呂場でのぼせてたんだぞ。オレがベッドまで運んでやった。」

「おおきに、ジン・・・あ！ちゅう事は・・・」

マリアはベッドから起き上がる。

マリアは下着姿だった。

「キャッ！ッ！！」

「仕方ないだろ、オマエ気絶しっぱなしだったんだから・・・」

「ジン！！！」

マリアは側にあった木刀をひつつかむ。

ガッ！

「ま、待てマール！！」

「今度という今度は許さへん!!」

マリアは木刀を振り上げた。

「ヒッ・・・」

ブン!!

ピタッ!

マリアは木刀をジンの頭の寸前で止める。

「・・・マール？」

「・・・まあ、のばせて溺れかけたウチを助けてくれたんやし・・・
今回の事は多めに見たるわ!そんな代わり・・・」

マリアはジンを引っ張った。

グイッ!

「わっ!」

マリアはジンをベッドに押し倒す。

「しばらく添い寝せえ。でないと許さへん。」

「ま、待て・・・今、オマエは・・・」

「つべこべ言うな!!」

マリアはジンを抱き寄せた。

「う・・・（む、胸が・・・）」

「ウチがこんな事すんの、アンタにだけやからな！」

「マール・・・」

マリアとジンはお互いに赤面している。

すると、ドアを叩く音が聞こえた。

トントン！

「オレが出る。オマエはシャツでも着てろ。」

ジンはドアに近づくと、ドアを開ける。

ガチャ！

ドアの前に立っていたのは、メスカルだった。

「あら、2人でイチャイチャしてたの？マールが人前でシャツ1枚なんて事、滅多にないもんね。」

マリアは赤面している。

「用件は何だ・・・」

ジンは不機嫌そうに言う。

「あの方から命令よ。工藤新一とシェリーから血液採取してって。」

「血液か・・・その後はどうするんだ？」

「その後はジンに任せるらしいわ。じゃあ。」

そう言うと、メスカルは去って行った。

「オレに任せる・・・か。」

ジンは考え込んでいる。

マリアはそんなジンを見つめていた。

第11話：驚愕！？ジンの裏切り！！

コナン・哀・ベルモットの3人は、未だに牢屋の中にいた。

「これからどうなるのかしら・・・」

「さあな。」

「あら、何か音が聞こえてきたわ。」

コナンと哀が音のした方に目をやると、確かに足音がする。

牢屋の前に来たその人物は、ジンとマリアだった。

「気分はどや、お2人さん？」

「微妙。」

「まあ良い。2人共出ろ。用事だ・・・」

「用事？」

「あの方からの命令でな、オマエ達の血液を採取しろとの事だ。」

「血液を？」

「そうだ。」

ジンはコナンと哀を連れ出し、縄だけをほどく。

「ついて来い。マールはベルモットとここにいろ。」

「了解。」

ジンはコナンと哀を連れて行った。

「マール、あなたやジンは何を考えているの？」

「そやなあ・・・こういう事考えてるわ。」

マリアは腰につけていた木刀を抜き、かざした。

スラッ！

「ま、まさかマール・・・」

「フッ・・・」

「や、止め・・・」

「ハアッ！！」

マリアは木刀を振り下ろす。

ゴォッ！！

「キャアアアッ！！」

ベルモットの悲鳴が、牢屋内に響いた。

ベルモットの悲鳴は、ジンに連れられたコナンと哀にも聞こえていた。

「ベルモットの悲鳴!？」

「一体何が・・・」

「マールのヤツ、またか・・・ホラ、着いたぞ。」

ジンはコナンと哀を部屋に入れる。

ジンは手錠を1度外し前手に掛け直すと、コナンと哀をそれぞれイスに座らせた。

「今から血液を採るが、あまり暴れるなよ。なるべくすぐに終わらせたい。」

「・・・」

コナンと哀は黙ってうなづく。

「聞き分けが良いな。では、注射器を刺すぞ。」

ジンはコナンと哀の腕にそれぞれ注射器を突き刺し、血を少し抜いた。

プスッ！

チウウ・・・

「う・・・」

コナンと哀は苦痛で顔をしかめる。

「採取完了だ。」

ジンは血液をペットボトルに入れると、コナンと哀の方を向いた。

「いよいよか・・・」

「私達、もうお終いね・・・コナン君、あの世で幸せになりましたよ
う・・・」

「ああ・・・」

コナンと哀は、死を覚悟している。

だが、ジンの口から出た言葉は意外なものだった。

「任務は終わった。逃げるぞ？」

「え？」

「ジン、何言って・・・」

「何度も言わすな。このアジトから脱出するぞと言ってるんだ。」

「え・・・ええっ！!!?」

ジンの真意とは、果たして!?

第12話：アジトからの脱出

「何度も言わすな。ここから脱出するぞと・・・言ってるんだ。」

「ええ〜っ!!?」

「何だ、それほど驚く事か？」

「何でだよ、ジン・・・」

「あなた、執拗に私達を狙っていたじゃない!」

「ああ・・・だがそれはこないだまでのオレだ・・・今のオレは、オマエ達を助ける・・・その1択のみ。さあ、出るぞ。」

コナンと哀はジンに導かれるままに、部屋を出た。

「なあ、ジン。そろそろ教えてくれないか？」

「なぜ急に私達を逃がそうと思ったの？」

「オレが変わったのは、きっとマールに出会ったからだろう。」

「マリアちゃんに？」

「ああ・・・アイツはとても明るく、一緒にいると気持ちが落ち着くんだ。アイツとの出会いがなけりゃ、オレは躊躇なくオマエ達を殺していただろうからな。」

コナン達がしばらく歩いていると、マリアとベルモットがやって来た。

「ベルモット!」

「どうしてここに?」

「マールに助けてもらったのよ。驚いたわ、2人が組織を裏切るつもりだったなんて。」

「ウチらはもう組織に未練ないからな。」

「さあ、このまま脱出だ。」

コナン達はアジトの外に出る。

すると、眼前にカシヤツサがいた。

「カシヤツサ!?!」

「逃がさんぜよ、裏切り者が!?!」

コナン達の後ろから、メスカルとミードもやって来る。

「驚いたわ、牢屋に行ったらベルモットがいないんだもの。」

「アンタ達、組織から逃げられるとでも思ってたの？」

そう言うのと、カシャツサ達はポケットからカプセルを取り出した。

「何だ、あれは？」

「あれは5獄衆にのみ支給される秘薬・・・トランドキシンだ。数字によつて効果が違うんだよ。ベルモット、新一とシェリーを任せられるか？」

「ええ・・・」

「いくぞ、マール。」

「そやね。5獄衆に勝てるんは・・・同じ5獄衆だけや!!」

第13話：5獄衆VS5獄衆！！1

「『同じ5獄衆なら勝てる』か・・・ジン、お主某に1度でも勝った事あつたきにか？」

「バカが、あれは手加減していたのさ。まあ今回は・・・手加減してやらん・・・がな！！」

ジンは薬を飲み込むと、人狼のような姿に変身した。

「燃えてきたぜよ！！」

カシヤツサも薬を飲み、猿人の姿に変身して対抗する。

「あれが、ジンの変身？」

「そや。ジンはよう『銀狼のジン』なんて言われとってな。5獄衆でもその腕は1・2を争う腕前や。おっと、無駄話しとつヒマはなかったな。」

マリアは薬を飲み女王バチのような姿に変身すると、針を連射した。

ズドドドドドドドドドド！！

「ちよつ、マリアちゃん！？」

「いきなりそんな・・・」

「大丈夫や。向こうも策はあるやろ。」

シュウウウウウ・・・

煙が晴れると、そこには無傷のミードとメスカルがいた。

「アタシの薬は『鉄鎧亀』・・・どんな攻撃も防げる・・・行きなさい、メスカル。」

「あいあい。」

メスカルは薬を飲むと、河童の姿になった。

「えいやっ!」

ビュン!!

「わわっ!」

コナン達はかろうじて避けた。

「何てリーチが長い・・・」

「河童いうんは、左右の腕が繋がってうらしいからな。ベルモット、2人を頼めるか?」

「一応・・・」

「ほな、頼んだで。」

マリアはそう言うが早いか、メスカルに突っ込んだ。

「らあっ!!」

マリアは村正を振り、メスカルに斬りかかる。

「わっ、キャッ!!」

「スゴい・・・あのマリアちゃんがここまで・・・」

「余所見してる場合？」

「!?!」

コナンと哀が振り向くと、ミードが突っ込んできた。

「ロケット頭突き・・・止めれるかしら？」

「2人共下がって!!」

「!!」

ベルモットはコナンと哀の前に出ると、薬を飲み込む。

すると彼女の姿は九尾の狐になっていた。

ガシッ!!

「なっ!?!」

「喰らいなさい・・・火炎放射!!」

ベルモットはミードの腹部目掛けて、火炎放射を撃ち込む。

「甘いわね、アタシの甲羅は鉄鎧だと・・・」

「誰が燃やすだけと言った？」

「え・・・」

「ペットボトルキャノン!!」

ベルモットはどこからかペットボトルがついた銃を取り出した。

ブシュウウウ!!

「キャアツ!!」

「ミード、あなたも知ってるわよね?どんなに硬い装甲も、熱した後急激に冷やされると脆くなる事ぐらい・・・」

ピシッ!

「あ・・・」

ピキ、ピキ・・・

「ああああ・・・」

バキーン!!

「キャアアアアッ!!」

ミードの腹部の装甲は砕け、柔らかい肌が出しになった。

「ハアッ!!」

ベルモットはすかさず、鉄拳をミードの腹部に撃ち込む。

ドスッ!!

「あう・・・」

ドサッ・・・

ミードは地面に倒れた。

「まずは、1人目・・・」

ベルモット、大活躍!!

第14話：5獄衆VS5獄衆！！2

「よくもミードを！！妖術・カッパンチ！！」

メスカルは腕を伸ばしてきた。

だがマリアは華麗にかわしていく。

「うっっ、当たんないっ！！」

「当たり前やろうが。冷静さを失ったヤツの攻撃を、ウチが見切れるんとも思っんか？」

「うっ！！こうなったら、メスカル秘蔵の妖術使ってやるんだからっ！！」

メスカルは腕を元に戻す。

「必殺！河童のいかず・・・」

「させるか。」

マリアは飛び上がると、針をメスカルの頭に突き立てる。

トスッ！

「あ・・・」

ビカッ！

バリバリバリ！！

「うきゃああああっ！！」

メスカルは自分が放った雷をともに喰らい、気絶した。

「メスカルもやられたか、情けないきに。」

「随分と余裕だな、カシャツサ。」

「当然ぜよ。某は負けるのが嫌いじゃき。だから・・・最初から全力でいくぜよ！！」

カシャツサは背中から炎を発生させ、身体にまとった。

ゴオオオオオ・・・

「『業火の猿人カシャツサ』と呼ばれるだけはあるな。」

「どうしたジン、怖じ気づいたきにか？」

「まさか。ハアアアアッ！！」

ジンは身体に冷気をまとった。

「血迷ったぜよか、ジン？某の能力は炎・・・」

「カシャツサ、オレの冷気を甘く見るなよ。」

ジンは尻尾から冷気を矢のように放った。

ドドドドドド！！

「ウォアッ！！」

ドスドスドス！！

「チィッ・・・やはり『冷徹な銀狼』と呼ばれるだけはあるぜよ・・・」

「フッ・・・」

「やるなあ、ジン。」

「そうね・・・」

コナンと哀は、ジンの強さに感服していた。

だが彼らは気づいていなかった。

メスカルがゆっくりと起き上がった事に。

「カップドリル・・・喰らえ！！」

メスカルは両手をドリルに変え、コナンと哀に向かって行く。

ドンッ！！

「しまった！！」

ベルモットは離れた位置でミードの相手をしていたため、反応が遅れた。

「・・・!!」

コナンと哀は目を瞑る。

ドスッ!!

だが、貫かれた感触はない。

恐る恐るコナンと哀が目を開けると・・・

「グッ・・・」

そこにいたのは、コナンと哀を庇いメスカルのドリルに貫かれたマリアだった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218h/>

浪花から来た黒き女刺客(スパイ)

2011年10月9日04時08分発行